

『少年の日の思い出』作品論に関する一考察： 作品構造と語りを中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-11-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 初谷, 和行 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/645

『少年の日の思い出』作品論に関する一考察

—作品構造と語りを中心に—

A Study of “Jugendgedenken” by Hermann Hesse
—Focus on Literary Structure and Narrator—

初谷和行^{*}
HATSUGAI Kazuyuki

1. 目的と方法

ヘルマン・ヘッセ（Hermann Hesse 1877-1962）による短編小説『Jugendgedenken』は、ドイツ文学者である高橋健二により『少年の日の思い出』として翻訳され、1974年以降、中学校国語科における定番教材として、今日まで教科書に掲載されている。そして他の定番教材と同様に、国語教育を視野に据えた作品論が多く見られる。本稿では、『少年の日の思い出』に関する近年の作品論を概観・整理した上で、本作品の作品論に関する課題について論じる¹。

2. 『少年の日の思い出』の作品論に関する先行研究

2.1 近年の作品論の出発点

本作品の近年の作品論において大きな影響を及ぼした先行研究として竹内（2001）²がある。本作品は、「私」のもとに「客」と訪れやりとりをする場面（第一場面とする）と、「私」が「客」に見せた蝶の収集をきっかけに、「客」が自らの少年の日の思い出を語り出す場面（第二場面とする）に分けることができるが、この二つの場面の語りについて、竹内（2001）は次のように言及する。

それ（引用者註：「客」が罪責感と恥ずかしさを持っていること）を考えると、かれ（引用者註：「客」）の話は、かれのなかで反芻されてきたものに違いないから、筋の通ったものであっただろうが、それでもその語りはつつかえ、よどみ、つまるものであったのではないか。そればかりか、自分を責めすぎるといふ偏りがあったのではないか。

ところが、小説は、かれの話を筋の通ったものとして提示している。それは、わたしがかれの話を聞き取り、ひとつの物語に書いているからである。

すなわち、第二場面における「客」による回想の語りの内容は、「客」から回想を聞かされた「私」が、「客」の語りを再編した（語り直した）という見方であり、このような、「私」による語り直しという作品の語りのとらえかたは、以後、現在に至るまでの作品論の前提としてとらえられて

^{*} 武蔵野大学教育学部

いる。ここを出発点として、以後の作品論を概観・整理したい。

2.2 「私」の語り直しに基づく『少年の日の思い出』の読みの展開

竹内（2001）が指摘したような、本作品が「私」による語り直しであるという前提のもと、実際の読みは、作品の構造の特徴を起点に展開された。本作品は、大人の「私」と「客」からなる第一場面と、「客」が「僕」として少年の日の思い出を回想する第二場面からなるが、第一場面から第二場面に移行した後で、大人の「私」と「客」の場面に戻ることなく作品は終了している。このように、本作品は、不完全な額縁構造（以下「片縁構造」とする）である。本作品の読みは、このような、作品が片縁構造であることと、「私」による語り直しであることを合わせながら展開されていった。このことについて、竹内（2005）①及び竹内（2005）②、角谷（2012）、田中（2012）、須貝（2012）、丹藤（2014）の読みをとりあげる。

2.2.1 竹内（2005）①及び竹内（2005）②の作品論

竹内（2005）①では片縁構造であることについて、「彼の語りにたいするわたしの応答は、彼の幼児時代の出来事をいっぺんの小説に仕上げたことのなかにすでに提示されている」とし、その提示された内容に関して次のように述べている。

たしかにぼくは加害者として裁かれなければ、許されないのだが、ぼくも二度にわたってエーミールに傷をつけられた被害者なのである。その意味では、二度もぼくを傷つけた彼の加害行為が裁かれることなしには、受けた傷も癒やされないし、彼も許せないし、自分も許せないのである。

ここに「彼」（客）にたいする「わたし」（主人）の応答がある。「わたし」（主人）は「彼」（客）の二重の苦しみに応答して、「彼」（客）の話を語り直したのである。だとすると、冒頭で指摘したように、今度は「彼」（客）がこれを読んで、その受けた傷を癒やすことができたか、その罪から解放されたのかを語らねばならない。

しかし、それは読者の一人ひとりに委ねられていることである。それに応えたとき、読者は「一度起きたことは、もう償いのできないものだ」という「ぼく」の絶望的な断念を超えて、「罪は許される」ことを発見することができるのではないか。そればかりか、読者は「わたし」と「彼」との対話をひとまとまりのものとして閉じることができるにちがいない。

このような自身の読みに対して、竹内（2005）②では、「主人は語りなおしのときだけでなく、書斎の場でも客の語りに応答し、それに注釈と批評を加えていたと考えられる」と読みをとらえ直した上で、「そうとらえると、この小説は、客の語りを主人がたんに語りなおしたものであるというよりは、客と主人の対話を主人が語りなおしたといわなければならない。だから、そのなかに客の声だけでなく、その場の主人の声も織り込まれているということになる」としている。その上で、第一場面における「私」の蝶集めを再開した状況などをふまえ、次のように作品の読みを展開している。

主人の語りなおしは、「客」の過去の行動を当時の「ぼく」の外的・内的な対象（ものや人）との関係に据えなおして、そのもつれをときほぐし、少年期の思い出をけがしてしまったという思い込みから「客」を解放しようとするものであるということが出来る。語り手は、客の語りの

語りなおしをつうじて、客が思い込みからつくりあげた物語を別の物語に再構成し直しているのである。その意味では、この小説は半世紀も前に「ナラティヴ・セラピー」を先取りしていたといえることができる。

2.2.2 角谷（2012）の作品論

片縁構造と「私」による語り直しであることによる本作品の読みについて、角谷（2012）は次のように述べている。

『少年の日の思い出』は、自分の罪を認めて償いをすることができないままにエーミールに対する憎しみを抱き続け、心の奥底に闇をかかえて少年時代から大人の今にいたるまでの時間を生きてきた男が、「私」に促されて、過去の記憶をなぞりながら語ることによって、さらに、それが「私」によって再び語り直されることによって、自分の罪が顕わなものとして目の前に晒され、その罪に対する罰を受けなければならないことを受け入れていく物語なのである。

「ぼく」が、少年時代に犯した自分の罪に気づき、エーミールに心の底から謝罪することができた時、「ぼく」は、他者との関係を取り戻して、今の「私」と同じように、もう一度「自分の幼年時代のいろいろの習慣や楽しみごと」の中で、「幼い日の無数の瞬間」を包み込んでいた「荒野の焼き付くような昼下がり」や「庭の中の涼しい朝」、そして「神秘的な森の外れの夕方」に、常に「美しいチョウ」の色を輝かせていた「光あふれる世界」を本当に取り戻すことができるようになるだろうということを、作品内読者となって再読する「はたらき」が明らかにしている。これが、この作品の〈語り〉の構造なのである。

2.2.3 田中（2012）の作品論

田中（2012）は、先述した角谷（2012）について、「ここでこの小説の構造、その〈ことばの仕組み〉をはっきり了解している」とした上で、次のように述べている。

大人の「ぼく」は今、「私」と向き合って少年時代の「ぼく」のことをかろうじて、主人の「私」に語ることができますが、その〈語り〉から自身を相対化出来ずにいます。これを「私」から聞かされることで、初めて、自身の物語を相対化する可能性を手に入れるのです。その意味で、「私」が一番語りたい相手である〈聴き手〉を「ぼく」なるものとするので、〈私〉が語り直す「少年の日の思い出」は鮮やかな語りをとります。

また、竹内（2004）での竹内の疑問³に対して、次のように述べている。

この作品のプロットは確かに「ぼく」の美へのただならぬ情熱が、末尾、やむなく、美の対象を自ら破壊させる形で終わっていますが、それにどのような意味があるのかは、その〈語り〉の構造が明らかにするはずです。「美を壊した」ことで「ぼく」はそれまでの人生を損なってしまいましたが、〈聴き手〉だった「私」がこれを語り直すことで、少年の「ぼく」とエーミールとかつての相関関係が作品内読者＝〈聴き手〉に新たに見えてきます。「ぼく」もエーミールとともに〈わたしのなかの他者〉の世界に閉じ込められたまま、相手をにくみあっています。その双方の世界を見渡せるのが「私」で、この「私」がこの物語を「ぼく」なるものに語り直すことで、「ぼく」はその閉じられた憎しみの牢獄から抜け出せるのではないのでしょうか。世界をどう捉えるか、他者をどう捉えるか、という愛と認識の問題がこの小説の核心であろうかと思われます。

2.2.4 須貝（2012）の作品論

須貝（2012）は、上記のような竹内（2005）①、角谷（2012）の論へ問題を投げかけた。竹内（2005）①に対しては、「〈読み〉の実際においては必ずしも「彼の語り」にたいするわたしの応答」という把握が活かされているとはいえない」とし、先に挙げた竹内の読みについて、「彼の話を小説に仕立てた」という竹内のとらえ方の問題、「私」の語り直しによって「〈わたしのなかの他者〉としての「ぼく」の〈語り〉が批評の対象とされていることが読み落とされていること」の問題、「私」の〈語り〉自体を問題化する〈語り手の自己表出〉→〈機能としての語り手〉の領域」が問題にされていないことに問題があるとしている。その上で、「語り手と語り口－教師用書と子どもの読み」については、「罪は許されないのか－「少年の日の思い出」を読む」の「具体を超える方向性が提示されている」としている。また、角谷（2012）については、「読みの大前提、授業づくりの大前提とされなければならないですが、そう把握しただけでは『少年の日の思い出』における「小説」の問題をとらえたことにはならない」とし、「「ぼく」の〈語り〉が展開する作品の後半部においては「私」が〈機能としての語り手〉として作用し、作品全体においては、「私」の〈語り〉に対して、先とは異なるレベルで〈機能としての語り手〉が作用しています。このことが角谷の論では問題にされていないのです。」と述べている。

一方、須貝（2012）における自身の読みはどのようなものであるか。須貝は「語り手の「私」は「ぼく」の外部に立っておりますが、同時にそのことを問題にすることによって、「私」の語るという行為そのものが問われます。なぜならば、「私」の〈語り〉は読み手の「ぼく」によって、自己省察の対象にされるだけではなく、「私」のまとめ方に対する議論をも誘発するに違いないからです」（傍点原文）とした上で、作品の中に「「闇」に囲まれた「光」（前半部分）→「光」の中に現れてくる「闇」」といったプロットと、「「闇」に囲まれた「光」（前半部分）→「光」の中に現れてくる「闇」→「光」に囲まれた「闇」（前半部分）→「闇」の中に現れてくる「光」」というメタプロットを見だし、本作品は「明暗の小説」であるとしている。具体的には、「「私」の語り直し＝叙述は「ぼく」を「光」の世界へ誘い、「私」においては自己の「闇」の世界と対話してなされていったことに」になり、「したがって、自らの文章の読み手である「私」はこのことに向き合うことになる」としている。更に、「〈機能としての語り手〉の領域において「私」の〈語り〉の虚偽性が問われ、「ぼく」と「私」の二つの「少年の日の思い出」が問われているのです。語り手の「ぼく」と語り手の「私」をめぐる、このように問題が二重化されている事態へ、『少年の日の思い出』の〈読み〉のベクトルは向かっています」と論じている。

2.2.5 須藤（2014）の作品論

丹藤（2014）⁴は、竹内（2005）①の「わたしの彼に対する応答がこの小説の中に織り込まれているのだから、この小説は結末部を必要としない」という把握を支持した上で、「わたしの書いた物語に対する彼の感想」ととらえることで、「「客」自身が過去の自分や「エーミール」と向き合い、対話する可能性が拓かれることになる」と述べている。そして、「私」による語り直しの理由を「「ぼく」の過去の出来事に対するとらえ方に疑義を持った、問題を感じたということになろう。「私」の語り直しは、「ぼく」にそのような問題性を突きつけるために行われたと言っても差し支えないだろう」として、次のように述べている。

「エーミール」は別に「世界のおきてを代表」するつもりなどないばかりか、「僕は悪徳だということに決めたのは、「エーミール」ではなく「ぼく」である。「ぼく」は、コンプレックスと欲望を隠蔽し、虚像としての「エーミール」をねつ造して、それと格闘し傷ついている。「チョウチョを一つ一つ取り出し、指でこなごなに押し潰してしまった」のは、「エーミール」に傷つけられたためではない。「エーミール」は「世界のおきてを代表」、自分は「悪漢」という自ら作り上げられた構図の中で破綻していったのである。自己化した「エーミール」ではなく、他者としての「エーミール」との対話を「私」が「ぼく」に求める所以である。

3. 『少年の日の思い出』作品論の課題

以上、作品論・教材論に関する先行研究を概観した。最後に、先行研究をまとめるとともに、そこから見いだされる課題について述べていく。

3.1 作品論と作品構造の関係

以上、語りと作品の構造をもとに読みを展開している作品論・教材論として、竹内（2005）①及び竹内（2005）②、角谷（2012）、田中（2012）、須貝（2012）、丹藤（2014）を概観した。最後に、これらの論について本作品の作品構造に照らし合わせながら整理することで、作品論・教材分析に関する課題について考察する。

本作品は、竹内（2001）以前は、「私」と「客」のやりとりによって展開される第一場面と「僕（客）」による少年の日の思い出の回想がなされる第二場面からなるというとらえ方が一般的であった。そこに、竹内（2001）により、第二場面が「私」の語り直しであることが提起された。このような前提で行われた先行研究は、「私」による語り直しの〈聴き手〉が「僕」（実体としての「僕」ではないという意味では、田中（2012）が述べる「「ぼく」なるもの）」であるという点で共通している。そして、「私」が語り直すことが「僕（なるもの）」にもたらすものとして、竹内（2005）②は、「「客」の過去の行動を当時の「ぼく」の外的・内的な対象（ものや人）との関係に据えなおして、そのもつれをときほぐし、少年期の思い出をけがしてしまったという思い込みから「客」を解放しようとするもの」とする。角谷（2012）は、「自分の罪が顕わなものであるという点で晒され、その罪に対する罰を受けなければならないことを受け入れていく」とこととする。田中（2012）は、「「ぼく」はその閉じられた憎しみの牢獄から抜け出せる」とする。須貝（2012）は、「読み手の「ぼく」によって、自己省察の対象にされるだけでなく、「私」のまとめ方に対する議論をも誘発するに違いない」とする。丹藤（2014）は、「自己化した「エーミール」ではなく、他者としての「エーミール」との対話を「私」が「ぼく」に求める」とする。それぞれの論は、「私」によって語り直される「僕」認識について、語り直されることによって、相対化することが促されるという点で共通する。しかし、そのことで「僕」が解放されるのか（竹内②、田中）、内省を促されるのか（角谷、丹藤、須貝）という点では、異なる。

3.2 『少年の日の思い出』作品論の課題

最後に、作品論・教材分析における課題について述べる。それは、須貝（2012）が指摘する「「私」の〈語り〉に対して、先とは異なるレベルで〈機能としての語り手〉が作用しています」という

ことをふまえた読みの展開である。そこには二つの課題がある。

一つめの課題は、各場面における「私」の語りについて、〈機能としての語り手〉を意識しながら読みを再構成することである。

第一場面における〈機能としての語り手〉に関して、角谷（2012）は、「物語というフィクションの中に入り込み、「私」と一緒に作品内の聞き手となって、「ぼく」の話に耳を傾ける」、「機能」としての語りの中に「ぼく」の語りに対する「応答」を読み取っていく」働きとしてとらえている。一方、須貝（2012）は、「語り直し、そして叙述することは、「私」の「それどころか」というくったくのない言葉の内実を自らに問うことにもなされていったはず（傍点は原文）」とした上で、「そうだとすると、ここにも語り手の「私」レベルにおける〈語り手の自己表出〉→〈機能としての語り手〉の領域が現れてきます」としている。そして、「このようにして〈機能としての語り手〉の領域において、「私」の〈語り〉の虚偽性が問われ、「ぼく」と「私」の二つの「少年の思い出」が問われているのです」と述べる。角谷、須貝を同じ〈機能としての語り手〉に関する考察ととらえるならば、角谷は「私」の語りに対する〈機能としての語り手〉が読み手をどのように方向付けるかという観点での考察、須貝は「私（なるもの）」に何をもたらすか（あるいは突きつけるか）観点での考察ということになるだろう。須貝からすれば、角谷のこの論考は、語りの虚偽性をとらえつつも、「僕（なるもの）」としての〈聴き手〉の領域にとどまるものであると指摘するかもしれないが、いずれにしても、第一場面において「私」が「いかに語ったか」ということを考察することが、「私」の語りに対する〈機能としての語り手〉をとらえることにつながり、そこから、作品の読みへとつながるのであろう。

第二場面については、例えば、先に挙げた竹内（2005）②、角谷（2012）、田中（2012）、丹藤（2014）の論考があるが、これらは主として、第二場面が「私」の語り直しとして語られることの、「ぼく」なるもの＝〈聴き手〉にとっての意味づけであると言える。言い換えるならば、「私」の語り直しによって、「〈わたしのなかの他者〉としての「ぼく」の〈語り〉が批評の対象とされている」ということであり、先行研究においては、「私」が語り直すことにより「「ぼく」なるもの」＝〈聴き手〉に何をもたらすのかという点まで読みが展開されていると言える。「私」の語りに対する〈機能としての語り手〉をとらえる際には、更に、「私」がこのような語りをするることによる「私」にとっての意味づけを検討する必要があるのではないだろうか。それは例えば、竹内（2005）②で、「私」の語りについて、「少年期の思い出をけがしてしまったという思い込みから「客」を解放しようとするものである」と述べたことをふまえつつ、更に、そのような目的で「客」に対して語った「私」の語りが、「わたし（なるもの）」に何をもたらすのか（何を突きつけるのか）を検討することである。

二つめの課題は、このような各場面における「私」の語りに対する「〈機能としての語り手〉」に関する考察をもとに、作品全体を統括する〈機能としての語り手〉に関して考察することである。例えば、竹内（2005）②では、「主人は語りなおしときだけでなく、書斎の場でも客の語りに応答し、それに注釈と批評を加えていたと考えられる」と読みをとらえ直し、「そうと考えると、この小説は、客の語りを主人がたんに語りなおしたものであるというよりは、客と主人の対話を主人が語りなおしたといわなければならない」としている。この認識は、作品全体を統括する〈機能としての語り手〉へとつながる考察であろう。しかしながら竹内は、「だから、そのなかに客

の声だけでなく、その場の主人の声も織り込まれているということになる」と続け、「私」の語りの虚偽性とその意味するもの（「少年期の思い出をけがしてしまったという思い込みから「客」を解放しようとするものである」）について考察していく。作品全体を統括する〈機能としての語り手〉を念頭に置くならば、竹内（2005）②の考察に加えて更に二つの点についてとらえたい。一つは、「客」を解放しようとする「私」の語りが「私」に何をもたらしただのかということに関する考察である。そしてもう一つは、「客と主人の対話を主人が語りなおした」ものであるのに、なぜ「客」の回想の対話が語られないのか（なぜ片縁構造なのか）ということである。

以上のことから、「私」の語りに対する「〈機能としての語り手〉」をとらえた読みのためには、例えば「私」の語りに関して、以下の点について考察することが求められるのではないだろうか。

- ① 「客」の語りを「私」はいかなるものとして受け入れたのか。
- ② 「私」は「客」との対話全体を、いかなるものとしてとらえたのか。
- ③ 上記②をふまえて、「私」は第一場面と第二場面をいかに語ろうとしたのか。
- ④ 上記②をふまえて、「私」は、「客」の語りに対する「私」の反応をなぜ語り直しの中に含めなかったのか。

4. おわりに

本稿では、『少年の日の思い出』に関する先行する作品論を概観・整理した上で、本作品における作品論の課題について述べた。角谷（2012）は、「作品の構造に着目するということが必ずしも作品の読みを深める方向には向かっていないように見えるのは、大人である「私」が語る現在の場面が「ぼく」の語る回想の物語を生き生きと伝えるための伏線として構成されているととらえる教師用指導書の読みを疑うことなく、冒頭から結末に向けてプロットが直線的に展開するものとして読んでいくからではないだろうか。」と指摘している。最後に述べた、作品論の観点に基づく具体的な作品論や、その作品論がどのように国語科授業実践に結びついていくのかに関しては、他の機会に考察を行いたい。

註

- 1 本稿における『少年の日の思い出』本文の引用の表記については、他の著者の論文等においては、当該著作物の表記のままとし、本稿の筆者が引用する際は、『伝え合う言葉 中学国語1』教育出版（平成29年1月発行）の表記による。そのため本稿では、例えば「彼」と「かれ」、「僕」と「ぼく」というような、表記上の不統一が見られる。
- 2 竹内（2001）は、後に「罪は許されないのかー「少年の日の思い出」を読む」と題されて別の文献（竹内（2005）引用・参考文献を参照）に再録されている。両者には作品の読みという点での内容的差異はないが、本稿の展開や内容によって、それぞれを引用する。
- 3 「（引用者註：竹内も田中も「私」の語り直しである」とらえたが）田中はその内容を良心問題としているのにたいして、私は「善を犯したことよりも美を壊した」ことを重くとらえていたからである。いったいどこですれ違うことになったのだろうか。」竹内常一（2004）「消される語り、聞き取られない語り」『日本文学』53 所収。なお、この論考は、竹内（2005）「消される語り、聞き取られない語り」『読むことの教育－高瀬舟、少年の日の思い出』山吹書店に再録されている。

- 4 丹藤(2011)の論考について、須貝(2012)はその問題点を指摘したが、その批判に応える形で丹藤(2013)の論考が書かれた経緯がある。丹藤(2014)は上記の須藤の二文献をまとめたものである。

引用・参考文献

- ・綾目広治(2001)「幼いチョウ収集家の〈逸脱〉」田中実／須貝千里『文学の力×教材の力 中学校編1年』教育出版
- ・竹内常一(2001)「罪は許されないのか」田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力 中学校1年生編』教育出版
- ・竹内常一(2005)①「罪は許されないのかー『少年の日の思い出』を読む』『読むことの教育－高瀬舟、少年の日の思い出』山吹書店2005年
- ・竹内常一(2005)②「語り手と語り口－教師用書と子どもの読み』『読むことの教育－高瀬舟、少年の日の思い出』山吹書店
- ・竹内常一(2005)③「消される語り、聞き取られない語り』『読むことの教育－高瀬舟、少年の日の思い出』山吹書店
- ・丹藤博文(2011)「語ること／語らぬことー教材『少年の日の思い出』の読みー」『国語国文学報』69
- ・角谷有一(2012)「『少年の日の思い出』、その〈語り〉から深層の構造へー『光』と『闇』の交錯を通して見えてくる世界ー」田中実・須貝千里編『文学が教育にできることー「読むこと」の秘鑰ー』教育出版
- ・田中実(2012)「ポスト・ポストモダンの〈読み方〉はいかにして拓かれるかーあとがきに代えてー」田中実・須貝千里編(2012)『文学が教育にできることー「読むこと」の秘鑰ー』教育出版
- ・須貝千里(2012)「『語り手』という『学習用語』の登場一定番教材『少年の日の思い出』(ヘルマン・ヘッセにてー)『日本文学』61
- ・丹藤博文(2013)「『少年の日の思い出』再論：須貝千里氏の批判を受けて」『国語国文学報』71
- ・佐藤文彦(2014)「『少年の日の思い出』(1931)試論ー「クジャクヤママユ」(1911)との異同をめぐるー」『金沢大学歴史言語文化系論集 言語・文学篇』6
- ・丹藤博文(2014)『文学教育の転回』教育出版